

績を取り上げ、現代のトマス研究を推進させた原動力としてそれを高く評価しながら、ここでもファブロの *La Noeione Metafisica di Partecipazione* (1938, 1950) がやはり、最初に上記の『注解』(第5問第3項)を論じていることを指摘し、かつ著者自身は、ファブロの解釈に従わないと表明し、ファブロのエッセ理解が形而上学の可能性に限界をもうけることになるのではないかという疑問を提起している。しかしこの点はむしろ、アリストテレス解釈者としてのトマスをどのように評価するかという別の問題に属することであろう。アリストテレス解釈者ならざるトマスを強調する諸説に対して、著者は、あくまでもアリストテレス解釈者としてのトマスを強調している。しかしその論じ方に『アナロジアの論理』と共通する傾き(著者は、アナロジアを論理的な概念であると見て、事物の存在の仕方ではなく認識されている事柄の表現の仕方にかかわると考える。)が見受けられるにしても、『ニコマコス倫理学』(本書第6章、なお著者には *Ethica Thomistica: The moral Philosophy of Thomas Aquinas* (1982) もある。)を取り上げ、ポエティウス(7章)、アルベルトゥス・マグヌス(8, 9章)、ボナヴェントゥーラ(10章)、スコトゥス(11章)らとトマス説の関係を論じ、アナロジアの問題に関してカエタヌス(18章)を取り上げ、また上に名前を挙げたトマス研究者たちのほかにもマリタン(19, 20章)について論じるなど、著者のトマス研究が豊かな内容を持っていることを、本書は如実に物語っている。

Camille Bérubé : *De l'Homme à Dieu selon Duns Scot,
Henri de Gand et Olivi.*

Istituto Storico dei Cappuccini. 1988, xiv+390 p.

八 木 雄 二

全部で十一編の論文を収めた論文集の形を取っているが、最初のものは残りの論文の意図と概略を示している。第二、第三論文はスコトゥス以前、第四から第九論文までがスコトゥスに関するもの、第十論文はスコトゥス以後、第十一論文はこの論文集ではあまり触れられていないスコトゥス神学の性格についての論文という構成である(論文名は文末を参照)。

著者のベリュベ神父は、中世哲学史家としてすでによく知られているポール・ヴィニョーと同年代の友人であり、スコトゥスならびに中世哲学史については彼とほぼ共通の理解をもっているようである。また現在国際スコトゥス学会の会長であり、スコトゥスに関する造詣は深く、すでに1964年に出した *La Connaissance de l'individuel au moyen âge* ではその研究の堅実さを十分に証明している。したがってこの論文集も大いに期待のもてるところなのであるが、著者はその始めにつきのように注意している。「この本は *De la Philosophie à la sagesse chez saint Bonaventure et Roger Bacon* の続編であり、神の認識という主題に関するフランシスコ会学派の別の進展について語るものである。したがってこの本はフランシスコ会学派についての一般的な入門書ではないし、特殊な主題についての教義史でもない。むしろ読者はその教義の一つ一つについてよく知っていることが求められる。」つまりこの論文集はかなり専門的な知識を前提して、特にジルソンに代表されるこれまでの中世哲学史に対して多くの批判を試み——その批判も細部の問題ではなく、かなり基本的な理解に関わる批判であって、それゆえに著者は細部に至るまでの知識を読者に求めているのである——たとえ初めは混乱が起きようとも、そこから十三世紀後半のフランシスコ会学派の歴史に関して新たな視野を切り開いてゆこうとしているのである。

この本の意図が上述のようなものであるので、それに対して一定の評価を示すことは書評子にはいささか荷が勝ちすぎる。ここでは著者が提示している主だった主張を紹介し、書評子に可能なかぎりでの評価を示すことでご容赦願いたい。第一にベリュベ神父はジルソンの単純化された中世哲学史に対して、ことにフランシスコ会学派内部の多元性の歴史的事実を強調する。すなわち、ジルソンは、スコトゥスの存在の一義性の説が、実はボナヴントゥラとヘンリクスの主張した照明説、つまり神が第一に知られ、それによって他のものも知られるという説と実質的には同じものであって表紙を換えただけのものだと主張し、それをアヴィチェンナのアウグスチヌス主義の名で括っているのであるが、ベリュベ神父は照明説の批判はスコトゥス以前にすでにフランシスコ会内部でオリヴィによって行われており、スコトゥスはそれを徹底しただけであることを明らかにして、フランシスコ会学派を単純な同一の主義主張の集まりと見なしているジルソンを批判する。

つまりベリュベ神父によれば、スコトゥスの照明説批判は表面的なものではなく、ジルソンのようにスコトゥスの存在の一義性を「姿を変えた照明説」と呼ぶのは明ら

かな誤りなのである。特に第五論文はスコトゥスの存在の一義性に関するジルソンとシャーセルとベツニの解釈を取り上げてこれを批判している。書評子もかつてシャーセルのスコトゥスの存在の一義性に関する論文を読んで、その捏造に近いスコトゥス像の記述に驚き、なぜヨーロッパでこのような研究が高く評価されるのが不思議でならなかったが、ベリュベ神父の批判を読んでようやくわが意を得た思いであった。

とはいえスコトゥスの「存在」理解には複雑な側面がある。ベリュベ神父はかつての認識論の研究を通して、知性の「共通対象」としての「存在」と、形而上学の諸対象を潜勢的に含む「潜勢的对象」としての「存在」をスコトゥスにおいて区別しなければならないことを主張する。ベリュベ神父によれば、ジルソンがスコトゥスの存在の一義性の主張をボナヴェントウラの照明説と実質的に同じであると見誤ったのも、この区別をないがしろにした故なのである。すなわち、スコトゥスの存在の一義性の主張において言われているところの「存在」は知性の「共通対象」として示される「存在」であり、この「存在」はアヴィチェンナが第一に知られると主張したところの「存在」ではない。したがって「存在の一義性」に関してスコトゥスをアヴィチェンナ的であると見なすことは誤りであるとベリュベ神父は主張する。

しかしながら、スコトゥスの「神の存在証明」は形而上学の「潜勢的对象」としての「存在」理解に基づいている。そしてこのことからスコトゥスの神の存在証明におけるアンセルムスの側面が現れる。第七論文によれば、スコトゥスの神の存在証明がアンセルムスのプロスロギオンにおける神の存在証明の一つの論理的展開と見なされるのも、歴史的にはオリヴィによるプロスロギオン研究があったことに基づいている。しかしスコトゥスの神の存在証明がある意味でアンセルムス的であること、特に初期の作品においてはその証明のうちにアプリオリな側面があることは、後期の作品においてそれが改められてゆくことと合わせて、スコトゥス哲学における「存在」理解の複雑な側面をわれわれに印象づける。ベリュベ神父は、この問題はテキストの成立順序、校訂等がその解決の鍵になると言っているが、この問題が、スコトゥスの哲学が根本的にはアヴィチェンナ的であると見るジルソン流のスコトゥス理解を再び奮い立たせることにもなりかねないことを、ベリュベ神父は警戒しているようである。

他方、このことはスコトゥス神学におけるもう一つの問題、つまり神は「超自然的に知られる」と言われるとき、この「超自然」の意味をスコトゥスがどのように理解しているかという問題と絡んでいる。というのもスコトゥスの『オルディナチオ』の

プロローグの第一問題のなかにこれについての論述があり、そこでスコトゥスは神の認識に対する人間知性の自然的傾きを認めているからである。ペリュベ神父はテキストに即した細かい解釈を示しながら、同時にその基礎的思想のもつ意味を第六論文においてイエズス会の現代の神学者たちの見解と比較しつつ明らかにしようと努めている。しかし、人間知性の神に対する自然的傾きの主張は、神認識の生得説か、あるいは照明による神への人間知性の普遍的触発をスコトゥス哲学のうちに予想させるものである。無論のこと人間知性の神への自然的傾きの主張はトマス主義のうちにも見出されるものである以上、ジルソン流の単純な解釈が通らないことは明らかである。書評子としてはこの問題は結局のところペリュベ神父が区別したところの知性の共通対象としての「存在」と形而上学の第一対象としての「存在」を区別したままで議論を進めることに無理があるのであって、やはりその二つの「存在」がどのように関わるかを明らかにすることから取り組まなければならないと考えている。

第十論文も注目すべき論文である。というのもスコトゥスのヴィヴス版全集のうちに見られる偽作の多くが、スコトゥスの死後スコトゥス哲学を受け継ぎこれを発展させたアントワヌ・アンドレの作品ではないかと疑われているからである。この問題の研究はスコトゥス自身の思想を正確に理解する上で欠かせないと同時に、初期のスコトゥス学派の動向を知る上でも重要である。ただし論文の内容はかなり専門的であって書評子としてはただこの方面の研究が順調に進むことを期待するばかりである。

この本の最後の第十一論文は1981年のスコトゥス学会における講演原稿であり、ペリュベ神父は神の愛、神の自由を受け取る人間知性についてのスコトゥスのヒューマニズム（被造物のなかで人間が特別な位置を占めるという認識）から、スコトゥス神学のもつアンセルムスのオプティミズムについて語っている。ただし講演原稿のためか論旨に鋭利さはない。著者の今後のスコトゥス神学の研究姿勢を語っていると言っていだろう。

全体としてこの本は最初に注意されているように、専門家向けのものであるため、各々の問題について行われてきた論争、またそれらが基づいているところのテキストについて十分な知識がなければ理解しがたいところが多分にある。註も不十分であるし、文献表もない。著者の研究はスコトゥス研究について堅実なものであるだけに、この本がこのように仲間うち向けのものになっていることは残念である。ことに英語圏ではスコトゥスの「自由意志」の問題がよく取り上げられるのに対して、ペリュベ

神父が「神についての知性認識」の問題という、スコトゥス神学の理解としては最も正しい攻めかたをしている点から言っても、その研究成果が若い研究者にもよく伝わるようであってほしいと願うのは、決して書評子一人の感想ではないと思われる。

なお各論文の表題は以下の通りである。

1. Les voies franciscaines vers Dieu
2. Olivi, critique de Bonaventure et d'Henri de Gand
3. Grandeur et misere de notre connaissance de Dieu chez saint Bonaventure
4. Jean Duns Scot, critique de l' <avicennisme augustinisant> sur l'objet de l'intelligence
5. Interprétations virtualisants de la thèse scotiste de l'objet de l'intellect
6. Dynamisme psychologique et existence de Dieu chez Duns Scot, Henri de Gand, J. Maréchal et B. Lonergan
7. Olivi, interprète de saint Anselme
8. Pour une histoire des preuves de l'existence de Dieu chez Duns Scot
9. De l'Être à Dieu chez Jean Duns Scot
10. Antonie André, témoin et interprète de Duns Scot
11. Humanisme, amour de Dieu et science theologique chez Duns Scot